

# 日本と韓国のことわざの特徴

## － 暫定 PS リストに基づく分析 －

鄭 芝淑

### 1. 目的

どの言語文化にも「ことわざ」と呼ばれる、昔から人々に好んで用いられてきた、教訓や生活の知恵などを盛り込んだ慣用句的表現がある。ことわざには、言語文化の違いを超えた普遍的な性質があると同時に、言語文化に特有の性質もあると考えられる。「比較ことわざ学」の主な目標の一つは、ことわざの持つ普遍性と個別性を明らかにすることである。

本稿の目的は、日本と韓国のことわざを客観的方法により比較し、それぞれの特徴の一部を明らかにすることである。比較の対象としたことわざは、鄭(2004)の暫定PSリスト<sup>1</sup>で度数 15 以上のもの(日本 584 件、韓国 613 件)である。この程度のことわざは、ことわざに多少の関心がある者なら大抵知っているものであり、ことわざの特徴は一般的によく知られたものの中に色濃く現れていると予想されるので、分析の対象として適当であると判断した。

### 2. 異形

同じことわざに異なる形が存在する場合が多い。異形を持つことわざについては、最も度数の高いものを代表形とする。本稿の特徴分析は代表形のみを対象とするが、必要に応じて異形を対象に入れた分析も行う。

異形の条件としては意味が同じであること、形式上の対応があることとする。異形のタイプはいくつかあるけれども、主なものは次の通りである。ゴシック体は代表形を意味する。

#### 文体の変化

いつも柳の下に泥鱈は居らぬ > いつも柳の下に泥鱈はいない

가 \_\_\_\_\_ (行く日が市日だ) > 가 \_\_\_\_\_ (行く日が市日だ)

### 構文の変化

噂をすれば影 > 噂をすれば影とやら

\_\_\_\_\_ ( 蛆虫怖くて醤油が仕込めないか ) >

\_\_\_\_\_ ( 蛆虫怖くて醤油が仕込めない )

### 語順

いつも柳の下に泥鱧は居らぬ > 柳の下にいつも泥鱧は居らぬ

가 \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ ( 粉売りに行くと風が吹き塩売りに行くと小糠雨降る ) > 가 가 \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ ( 塩売りに行くと雨が降り粉売りに行くと風が吹く )

### 省略

井の中の蛙大海を知らず > 井の中の蛙

가 \_\_\_\_\_ ( 行く馬に鞭を打つ ) > 가 \_\_\_\_\_ ( 行く馬に鞭打ち )

### 語の置き換え

柳の下の泥鱧 > 柳の下の大鯰

噂をすれば影がさす > 人事言えば影がさす / 謗れば影がさす

가 \_\_\_\_\_ ( 行く馬に鞭打ち ) > \_\_\_\_\_ ( 走っている馬に鞭打ち )

### 助詞

鶺鴒の真似をする鳥 > 鶺鴒の真似する鳥

가 \_\_\_\_\_ ( 行く馬に鞭打ち ) > 가 \_\_\_\_\_ ( 行く馬にも鞭打ち )

### 固有語と漢字語の交替

井の中の蛙大海を知らず > 井蛙 ( せいあ ) 大海を知らず

( 百回聞いても一回見ることに及ばない ) >

( 百聞は一見に如かず )

## 3. 特徴分析

### 3.1 体言止め

日本のことわざには、体言止めのものが非常に多い。対象としたことわざ全体のうち 239 例 ( 40.9% ) が体言止めの形式である。その中には動詞の連用形から派生した体言で終わるもの 45 例が含まれる。

[ 名詞止め ] : 石の上にも三年 / 一寸の虫にも五分の魂 / 嘘も方便 / 馬の耳に念仏 / 鬼に金棒 / 転ばぬ先の杖 / 三人よれば文殊の知恵 / 知らぬが仏 / 棚から牡丹餅 / 泣き面に蜂 / 人のうわさも七十五日 / 餅は餅屋 / 焼け石に水 / 弱り目に祟り目 / 論より証拠 など

〔連用形派生の体言止め〕：縁の下の力持ち / 枯れ木も山の賑わい / 苦しい時の神頼み / 弘法も筆の誤り / 七転び八起き / 暖簾に腕押し など

韓国のことわざにも体言止めのものがかなりあり、101 例 (16.5%) がこの形式である。そのうち 34 例は動詞の名詞化形である‘~ ’の形式である。

〔名詞止め〕：가 (行く日が市日) / (同じ値なら薄紅チマ) / (雉の代わりに鶏) / (金剛山も食後の景色) / 가 (自分の鼻が三尺) / (薬屋の甘草) / (井の中の蛙) / (塵積もって泰山) など

〔名詞化形止め〕： (冷水飲んで歯ほじくる) / (仰向けに寝てつばを吐く) / (地をついて泳ぐ) / (牛の耳に経を読む) など

ただし、韓国の場合は体言止めのことわざのほとんどに平叙文形式の異形がある (101 件のうち 93 件)。例えば、「가 (行く日が市日)」は「가 (行く日が市日だ)」の形でも使われ、これがことわざ辞典の見出しにされる場合もある。韓国の体言止めのことわざのうち、平叙文異形を持たないものは調査したものの中では次の 8 件だけである。

(怠け者の学者本めくる) / (他人の話をするのは冷めた粥を食べること) / (月見て吠える犬) / (水から出た魚) / (いただいた御膳) / (夜中に綾巻き) / (芝生で針探す) / 가 (一回の過ちは兵家の常) など

一方、日本のことわざでは、体言止めのものが完全文形式の異形を持つことはほとんどない。例えば、「鬼に金棒」は「鬼に金棒だ」のような形で使われることが多いと思われるけれども、「鬼に金棒だ」がこのことわざの代表形として見出しにしている辞典はない。

以上を総合すると、体言止めは韓国よりも日本で好まれることわざの特徴であると言えよう。

### 3.2 文種

完全文形式のことわざを、文種 (平叙文・疑問文・命令文) 別に比較してみよう。勧誘文や感嘆文の形式は韓国のことわざにも日本のことわざにも見られない。

## 3.2.1 平叙文

どの言語のことわざでも平叙文形式が基本であると考えられる。日本でも韓国でも完全文形式のことわざの大部分は平叙文形式である。

【日本】(280件): 雨降って地固まる / 石橋をたたいて渡る / 犬も歩けば棒に当たる / 溺れる者はわらをもつかむ / 恩を仇で返す / 猿も木から落ちる / 朱に交われば赤くなる / ちりも積もれば山となる / 背に腹は代えられない / 二度あることは三度ある / 能ある鷹は爪を隠す / 渡る世間に鬼はない など

【韓国】(434件): 가 (ザリガニは蟹の味方だ) /  
 (他人の宴に柿を出せ梨を出せという) / 가 가 (どうやって行ってもソウルに行きさえすればいい) / (信じていた斧に足の甲を突き刺される) / (針泥棒が牛泥棒になる) など

日本のことわざには平叙文形式がかなり少ないように見えるが、これは日本のことわざに体言止めが多いためである。平叙文形式と体言止め形式の比率を見ると、韓国では434件対101件と4倍以上の差があるのに対して、日本では280件対239件と同数に近い。日本語のことわざにおいて体言止めがいかに多いかがわかる。

## 3.2.2 疑問文

日本のことわざでは、疑問文形式のものは非常に少なく、調査対象としたことわざ584件の中では次の3件のみである。

鬼が出るか蛇が出るか / 燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや / 精神一到何事かならざらん  
 この最後の2件は中国古典に由来する反語的疑問文の例である。

一方、韓国には疑問文形式のことわざがかなりあり、調査対象とした613件の中に22件が含まれている。

가(慶州の石なら全部玉か) / (蛆虫怖くて醤油が仕込めるか) / (生きている人の口に蜘蛛の巣が張るか) / (誕生日にたくさん食べようと思って7日も食事を取らないか) / (焚かない煙突に煙が立つか) / (自分の癖を犬にやるか) / 가 (雀が精米所をただ通り過ぎるか) / (腕は内側に曲がるのであって外側に曲がるか) / (鳥の肉を食べたのか) / (どっちの拍子に踊ろうか) など

これらのことわざは、最後の2件を除いて、すべて反語的疑問文である。ことわざは一般に生活の知恵や教訓を述べたりするものであるから、単純な疑問文が少なく、陳述に近い働きを持つ反語的疑問文として使われることが多いの

は当然であろう。反語的でない疑問文は慣用句的な色彩が強い。

### 3.2.3 命令文

命令文形式のことわざは日本のほうが若干多く見られる。

【日本】(28件): あとは野となれ山となれ / 急がば回れ / 勝って兜の緒を絞めよ / 果報は寝て待て / 郷に入っては郷に従え / 善は急げ / 鉄は熱いうちに打て / 長い物には巻かれる / 人のふり見てわがふり直せ / 我が身をつねって人の痛さを知れ など

【韓国】(11件): \_\_\_\_\_ (石橋も叩いてみて渡れ) /  
 가 (知っている道も尋ねて行け) / \_\_\_\_\_ (浅い川も深く渡れ) /  
 \_\_\_\_\_ (登れない木は見上げることするな) /  
 \_\_\_\_\_ (井戸を掘るにも一つの井戸を掘れ) /  
 \_\_\_\_\_ (口は歪んでも正しく言え) など

### 3.3 古風な表現

日本のことわざには、活用形、文体、語彙など様々な点で古風な表現を用いたものが非常に多く見られる。調査対象のことわざのうち181件が何らかの点で古風な表現である。

〔文末形〕: 按ずるより生むがやすし / 帯に短したすきに長し / 光陰矢の如し / 先んずれば人を制す / 灯台下暗し / 毒をもって毒を制す / 敵は本能寺にあり / 時は金なり / 良薬は口に苦し など

〔接続形〕: 急がば回れ / 老いては子に従え / 雉も鳴かざれば撃たれまい / 鶏口となるも牛後となるなかれ / 虎穴に入らずんば虎児を得ず / 親しき中にも礼儀あり / 寄らば大樹の陰 など

〔否定形〕: 転ばぬ先の杖 / 触らぬ神に祟りなし / 発つ鳥跡を濁さず / 情けは人の為ならず / 二兎を追うものは一兎をも得ず / まかぬ種は生えぬ / 火のない所に煙は立たぬ など

〔語彙〕: 艱難汝を玉にす / 取らぬ狸の皮算用 / 泣く子と地頭には勝てぬ / 笑う門には福来る など

〔漢文調〕: 三十六計逃げるに如かず / 過ぎたるは猶及ばざるが如し / 精神一到何事かならざらん / 百聞は一見に如かず / 覆水盆に返らず など

これらのことわざの大部分は固定化されており、現代語表現に置き換えられた異形を持たない。また、「時は金なり」「二兎を追う者は一兎をも得ず」「艱難汝を玉にす」などのように、近代期になって西洋語から入ったことわざの多くも古風な表現形式を用いている。したがって、古風な表現形式は日本のことわざの重要な特徴の一つに数えることができるのではないかと思われる。

一方、韓国のことわざには、古風な表現を用いていると考えられるものは少なく、23件に過ぎない。表現の多様性もなく、( ) (...だ) に対する( )'

と疑問形語尾の‘( )’、それに古い語彙を含むものが若干見られる程度である。

〔文末形〕: 가 \_\_\_\_\_ (ザリガニは蟹の味方だ) / \_\_\_\_\_ (行けば行くほど泰山だ) / 가 \_\_\_\_\_ (虎のいない村は兎が先生だ) / \_\_\_\_\_ (服が翼だ) / \_\_\_\_\_ (婿は百年の客で嫁は終身の家族だ) / \_\_\_\_\_ (生きている人の口に蜘蛛の巣が張るか) / \_\_\_\_\_ (どっちの拍子に踊ろうか) / \_\_\_\_\_ (笑う顔に唾吐くか) / \_\_\_\_\_ (一匙の飯で腹いっぱいになるか) / \_\_\_\_\_ (念を入れて作った塔が崩れることがあるか) / \_\_\_\_\_ (愚かさは熊だよ) など

〔古い語彙〕: \_\_\_\_\_ (かまどの塩もつまんで入れてこそ塩辛い) / \_\_\_\_\_ (書堂の犬三年で風月を詠む) / \_\_\_\_\_ (殿様のお蔭でらっぱを吹く) など

しかも、このようなことわざ 23 件のうち、〔文末形〕の最後の 2 件と〔語彙〕の 3 件を除けば、他のすべてにおいて現代語的な表現に置き換えた異形がある。したがって、韓国のことわざでは表現の古さは重要な特徴であるとは言えない。

### 3.4 数詞

日韓両言語において数詞を含むことわざがかなり見られる。

【日本】(65 件) : 一寸の虫にも五分の魂 / 二兎を追うものは一兎をも得ず / 二度あることは三度ある / 二階から目薬 / 石の上にも三年 / 仏の顔も三度 / 早起きは三文の徳 / 三人よれば文殊の知恵 / 人のうわさも七十五日 / 百聞は一見に如かず など

【韓国】(50 件) : \_\_\_\_\_ (バッタも五六月が盛りだ) / 가 \_\_\_\_\_ (十指を噛んで痛くない指はない) / \_\_\_\_\_ (井戸を掘るにも一つの井戸を掘れ) / \_\_\_\_\_ (一を見れば十を知る) など

数詞を用いることが日本や韓国のことわざの特徴であると言えるかどうかについては、他の言語のことわざとの比較が必要である。また、どのような数詞が好まれるかについては、比較対象とすることわざの件数を広げて調査しなければならない。どちらも今後の課題としたい。

### 3.5 対句形式・並列形式

一つのことわざに含まれる二つの句が構造的にも意味的にも対になっている場合がある。対句は印象的であり記憶に留めやすいので、ことわざで好んで用いられる形式である。日韓いずれのことわざにも対句形式のものが非常に多い。

【日本】(121 件) : 言うは易く行は難し / 一を聞いて十を知る / 一寸の虫にも五分の魂 / 亀の甲より年の功 / 少年老い易く学成り難し / 小の虫を殺して大の虫を助ける / 人事を尽くして天命を待つ / 遠くの親類より近くの他人 / 人のふり見てわがふり直せ / 論語読みの論語知らず / 割れ鍋に綴じ蓋 など

【韓国】(81 件) : 가 가 ( 昼の話は鳥が聞き夜の話は鼠が聞く ) / ( 喧嘩はやめさせ取り引きは斡旋せよと言った ) / ( 十尋の水の中は分かって一尋の人の中は分からない ) など

日本の方が韓国よりも対句をよく用いるようであるが、それほど大きな差ではない。しかし、対句形式のことわざのうち並列形式のもの、つまり、明示的な接続要素を一切用いずに対句となる要素を並べた構造のものに限って比較すると、両者の間に顕著な違いが見られる。並列形式は韓国のことわざにおけるよりも日本のことわざにおいて圧倒的に多く見られる。

【日本】(43 件) : 当たるも八卦当たらぬも八卦 / あとは野となれ山となれ / 鬼も十八番茶も出花 / 帯に短したすきに長し / 勝てば官軍負ければ賊軍 / 聞いて極楽見て地獄 / 苦あれば楽あり楽あれば苦あり / 前門の虎後門の狼 / 旅は道連れ世は情け / 七転び八起き など

【韓国】(8 件) : 가 ( 往く砧棒来る綾巻き ) / ( 耳にかければ耳かけ鼻にかければ鼻かけ ) / ( 鶏が牛見るように牛が鶏見るように ) / ( 吹くと消えるか取ると破れるか ) / ( うまくいくと自分の手柄うまくいかなければ祖先のせい ) など

### 3.6 定型 ( パタン )

いくつかの異なることわざが同じ文章構造、同じパタンで作られていると感じられる場合がある。ことわざが次々に作られてきた過程で、ある表現が「成功した」ことわざとして定着し広く人々に知られ使われるようになると、それを手本にして同じ表現構造の別なことわざが作られたり、あるいは既に存在したことわざを同じ表現構造で言い換えたりするということが繰り返されたのではないかと想像される。<sup>2</sup>そのような繰り返しの結果がことわざの表現構造の定型化 ( パタン化 ) を生じさせたのであろう。

本稿では、3.1 で見た体言止めのことわざに限定して、そこに見られるいくつかの定型を抽出し、日韓のことわざを比較してみることにする。完全文形式のことわざにもいくつかの顕著なパタンが存在すると思われるが、これに関しては稿を改めて論じることにする。

(1) 【日本】「...に～」;【韓国】「... ～」

このパタンのことわざは、日本でも韓国でもかなり多く見られる。韓国のことわざの中では最も多いパターンである。

【日本】(32件)：青菜に塩 / 馬の耳に念仏 / 鬼に金棒 / 蛙の面に水 / 臭いものに蓋 / 釈迦に説法 / 立て板に水 / 豆腐に鋸 / 泣き面に蜂 / 糠に釘 / 猫に小判 / 寝耳に水 / 暖簾に腕押し / 焼け石に水 / 弱り目に祟り目 など

【韓国】(19件)： (犬の足に蹄鉄) / (犬の飯にどんぐり) / (猫の前に鼠) / (底の抜けた甕に水を注ぐ) / (突然に綾巻の棒) / (薬屋に甘草)<sup>3</sup> / (牛の耳に経を読む) など

(2) 「...にも～」6件

日本のことわざには6件あるが、韓国のことわざには1件もない。<sup>4</sup>

石の上にも三年 / 一寸の虫にも五分の魂 / 鬼の目にも涙 / 弘法にも筆の誤り / 盗人にも三分の理 / 馬子にも衣装

(3) 【日本】「...の～」;【韓国】「... ～」

日本のことわざでは最も多いパターンであるが、韓国のことわざではごくわずかしが見られない。

【日本】(82件)：医者の不養生 / 命あつての物種 / 独活の大木 / 転ばぬ先の杖 / 取らぬ狸の皮算用 / 風前の灯 / 怪我の功名 / 紺屋の白袴 / 年寄りの冷や水 / 他山の石 / 鳥無き里のこうもり / 引かれ者の小唄 / 目の上の(たん)こぶ / 苦しい時の神頼み / 論語読みの論語知らず / 宝の持ち腐れ / 安物買いの銭失い / 河童の川流れ など

【韓国】(4件)： (絵の餅) / (姻戚の八親等) / (鳥の足の血) / (天の星取り) など

日韓で大きな差があることには、所有格助詞「の」と「」の使用頻度の差が関係しているかもしれない。

(4) 「...より～」

このパターンは日本のことわざにしか見られない(12件)。<sup>5</sup>

氏より育ち / 生みの親より育ての親 / 亀の甲より年の功 / 長者の万灯より貧者の一灯 / 遠くの親類より近くの他人 / 花より団子 / 論より証拠 など

(5) 【日本】「...も～」;【韓国】「... ～」

日本のことわざにはかなり見られるパターンであるが、韓国のことわざにはごく少数しか見られない。



【日本】(17件)：当たるも八卦当たらぬも八卦 / 嘘も方便 / 鬼も十八番茶も出花 / 枯れ木も山の賑わい / 口も八丁手も八丁 / 地獄の沙汰も金次第 / 袖振り合うも他生[多生]の縁 / たで食う虫も好き好き / 人のうわさも七十五日 / 仏の顔も三度 など

【韓国】(3件)： (心配も運) / (金剛山も食後の景色) / (同じ母の子息もいろいろ)

#### (6) 「...から～」

このパターンは日本のことわざにしか見られない。ただし、次の4件のみである。

棚から牡丹餅 / 二階から目薬 / 瓢箪から駒 / 藪から棒

#### (7) 【日本】「...は～」; 【韓国】「... / ～」

日本のことわざにはかなり多く見られるパターンであるが、韓国のことわざの中にはごくわずかしかない。

【日本】(30件)：秋の日はつるべ落とし / 蛙の子は蛙 / 兄弟は他人の始まり / 口は禍の門 / 失敗は成功のもと / 蛇の道は蛇 / 旅の恥は掻き捨て / 短気は損気 / 生兵法は大怪我のもと / 餅は餅屋 / 早起きは三文の徳 / 楽は苦の種 など

【韓国】(5件)： (他人の話をするのは冷めた粥を食べること) / (ままにならないのは相舅の奥の間) / (夫婦喧嘩は包丁で水を切ること) / (最初の娘は家財の元) / 가 (一回の過ちは兵家の常)

#### (8) 【日本】「...が～」; 【韓国】「... / 가～」

日韓いずれのことわざにも見られるパターンである。ただし、数は多くない。

【日本】(8件)：知らぬが仏 / 言わぬが花 / 負けるが勝ち / 一事が万事 / 金の切れ目が縁の切れ目 / 逃げるが勝ち / 情けが仇 / 思い立ったが吉日

【韓国】(9件)：가 (行く日が市日) / (雉捕るのが鷹) / 가 (自分の鼻が三尺) / (喉が捕盗庁) / (無消息が喜消息) / (子のないのが大吉) / (安いのがおから餅) / (タバコ入れの金が巾着の金) / (知るのが病)

以上を総合すると、日本のことわざの方が韓国のことわざより定型表現を好む傾向にあると言える。

### 3.7 助詞

Walle (1997) は、助詞「も」が「～すら」「～さえ」の意味で多用されることを日本のことわざの特徴の一つとして挙げている。<sup>6</sup>しかし、韓国のことわざでもこれに対応する助詞「」がまったく同じ使われ方をしている。しかも、

かなり数が多い。

【日本】(46 件) : 犬も歩けば棒に当たる / 溺れる者はわらをもつかむ / 枯れ木も山の賑わい / 雉も鳴かざれば撃たれまい / 猿も木から落ちる / ちりも積もれば山となる / 二兎を追うものは一兎をも得ず / 人のうわさも七十五日 / 仏の顔も三度まで など

【韓国】(60 件) : \_\_\_\_\_ (犬の糞も薬にしようとするばない) /  
 \_\_\_\_\_ (石橋も叩いてみて渡れ) / \_\_\_\_\_ (牛の角も一氣に抜けという) / \_\_\_\_\_ (虎も自分の話をすればやって来る) など

また、助詞「と」にもことわざならではの用法がある。「...と～」のように 2 つのものを結ぶのであるが、単純に結合するのではなく、「...は～と同様に」のような意味で前者を際立たせる働きを持つ用法である。表現に滑稽味や奇抜さを与え印象的にする効果がある。

泣く子と地頭には勝てぬ / 女房と畳は新しい方がよい / 理屈と膏藥はどこへでもつく

調査対象としてことわざの中では上の 3 件だけであるが、暫定 PS リストの上位 2,000 位まで対象を広げると、以下のものを含む 22 件があった。

商人と屏風は直ぐには立たぬ / 言うことと牛のしりがいははずれない / 意見と餅はつくほど練れる / 医者と味噌は古いほどよい / 嘘と坊主の頭はゆったことがない / 男心[女心]と秋の空 / 親の意見と茄子の花は千に一つも仇はない / 親の意見と冷酒は後で利く / 金持ちと灰吹きは溜まるほど汚い / 口と財布は締めるが得 / 馬鹿と鉄は使いよう など

「と」に対応する韓国語の助詞「 / 」にも、ごく少数ではあるが同様の用法がある。調査対象のことわざの中には次の 1 件があった。

(便所と姻戚の家は遠くなければならない)

暫定 PS リストの上位 2,000 位まで対象を広げると、さらに次の 6 件が見られたが、日本のことわざに比べれば、その数はかなり少ない。

(猫のおかげと嫁のおかげはわからない) /

(人とひさごはあるだけ使う) /

(子

供と犬は好かれるところに行く) /

(薪の火と女はほ

じくると困る) /

(灰皿と金持ちは溜まるほど汚い /

(黄泉路と便所は代わりに行けない)

日韓のこの違いは、日本のことわざが言葉遊び的表現を好むという一般的傾向の現れであると考えられる。

### 3.8 西洋語起源のことわざ

日本のことわざの中には西洋語起源のものがかなりある。今回の調査対象の中には次の 25 件が含まれる。

溺れる者はわらをもつかむ / 二兎を追うものは一兎をも得ず / 便りのないのはよい便り / 火のない所に煙はたたぬ / 一石二鳥 / 終わりよければすべてよし / 火中の栗を拾う / 艱難汝を玉にす / 木を見て森を見ず / 芸術は長く人生は短し / 賽は投げられた / 事実は小説よりも奇なり / 大山鳴動して鼠一匹 / 血は水よりも濃い / 沈黙は金雄弁は銀 / 鉄は熱いうちに打て / 天は自ら助くるものを助く / 時は金なり / 必要は発明の母 / 笛吹けど踊らず / 豚に真珠 / 冬来たりなば春遠からじ / ペンは剣よりも強し / 目には目歯には歯 / ローマは一日にしてならず

一方、今回の調査で対象とした韓国のことわざの中には、西洋起源のものは、最初の4件に対応するものしか見られなかった。暫定PSリストの上位2,000位まで対象を広げても数は変わらない。ただし、このような西洋語起源の表現が韓国で知られていないというわけではない。なじみがあるという点では日本とあまり変わらないと思われるが、韓国では、西洋語起源のものはことわざとして意識されにくいということである。ここに、ことわざの定義の普遍性 / 個別性の一端が現れている。

以上をまとめると次の表のようになる。<sup>7</sup>

特 徴		日 本	韓 国
体言止め		239 (40.9%)	101 (16.5%)
文 種	平叙文	280 (47.9%)	434 (70.8%)
	疑問文	3 (0.5%)	22 (3.6%)
	命令文	28 (4.8%)	11 (1.8%)
古風な表現		181 (31.0%)	23 (3.8%)
数 詞		65 (11.1%)	50 (8.2%)
対 句		121 (20.7%)	81 (13.2%)
並 列		43 (7.4%)	8 (1.3%)
定 型	「...に～」;「... ～」	32 (13.4%)	19 (18.8%)
	「...にも～」	6 (2.5%)	0 (0.0%)
	「...の～」;「... ～」	82 (34.3%)	4 (4.0%)
	「...より～」	12 (5.0%)	0 (0.0%)
	「...も～」;「... ～」	17 (7.1%)	3 (3.0%)
	「...から～」	4 (1.7%)	0 (0.0%)
	「...は～」;「... / ～」	30 (12.6%)	5 (5.0%)
	「...が～」;「... /が～」	8 (3.3%)	9 (8.9%)
定型計		191 (79.9%)	40 (39.6%)
助 詞	「も」;「... ～」	46 (7.9%)	60 (9.8%)
	「と」;「... / ～」	3 (0.5%)	1 (0.2%)
西洋語起源		25 (4.3%)	4 (0.7%)

#### 4.まとめと今後の課題

以上の分析により、日本と韓国のことわざの特徴の一端が明らかにされたと思う。本稿で述べたような日韓の相違点については、これまでも直感的には

観察されていたかもしれないが、PS リストという日韓のことわざに関して共通の手順で作成されたリストに基づいて比較をしたことにより、客観性を持った分析ができたのではないかと思われる。

本稿では、比較的簡単に処理できることわざの特徴だけを取り上げた。ことわざの簡潔性、韻律性、比喩性、機能（教訓性、ユーモア）、語彙的特徴など、同じ手順で比較すべき特徴が数多く残されている。今後はこれらの特徴の分析を行い、日韓のことわざの特質をさらに鮮明にしていきたい。

本稿は、2005年3月18日にことわざ研究会の例会（於：明治大学）において口頭発表した原稿に加筆・修正したものである。

### 注

- 1 各言語のことわざは、よく知られよく使われるものから非常に特殊なものまで段階的に分布すると考えられる。このことわざの持つスペクトル的性格を反映したリストを「ことわざスペクトルリスト」(Paremiological Spectral List)略して「PS リスト」(PS-List)と呼ぶ。1980年以降に日本と韓国で出版されたことわざ辞典、ことわざ集それぞれ約30点を資料として、個々のことわざの記載があるかどうかを調査し、日韓それぞれのPSリストを作成した。どちらのリストでも度数1から度数30までの30段階に区分されている。日本のPSリストは約9,000件、韓国のもは約10,000件のことわざで構成される。日韓のPSリストの対応する部分を比較の対象とすることによって客観的比較が可能になる。
- 2 創作ことわざでも、既存のことわざのパロディなどの形で同じ表現構造を持つことわざが作られることが多い。創作ことわざについては、永野（1997）を参照。
- 3 下の(3)のタイプの「                    」（薬屋の甘草）という異形もよく使われる。
- 4 PSリストの2,000位までを見ても1件もない。
- 5 PSリストの2,000位までを見ても1件もない。
- 6 Walle, W. V. (1997) p.169
- 7 定型欄の百分率は、体言止めの件数を母数としたものである。

### 参考文献

- 鄭芝淑（2004）「日本と韓国のことわざ共感度調査」『ことばの科学』（名古屋大学言語文化研究会）第17号，pp.237～256
- （2005）「日本と韓国のことわざ認知度」『多元文化』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多言文化専攻）第5号，pp.241～252
- 永野恒雄（1997）「創作ことわざ」の理論と実践」『ことわざ学入門』（ことわざ研究会編）遊戯社，pp.66～85
- Walle, W. V. (1997)「ことわざの言語思想」『ことわざ学入門』（ことわざ研究会編）遊戯社，pp.157～171